

(4) ウ メ

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
かいよう病 (<i>Pseudomonas</i>)	①防風垣を設置する。 ②発病枝を切り取り、処分する。 ③ほ場内の排水を良好にする。 ④適切な肥培管理に努める。	①3月下旬～5月下旬に農薬を散布する(収穫前日数に注意)。 (例) オキシテトラサイクリン水和剤(マイコシールド) オキシリニック酸水和剤(スターナ水和剤)(小粒核果類) ②多発園では収穫後の6～7月と秋期に農薬を散布する。 (例) オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン水和剤 (アグリマイシン-100) ストレプトマイシン・チオファネートメチル水和剤(アタッキン水和剤) ③休眠期の葉芽発芽前までに散布する。 (例) 銅水和剤(IC ボルドー66D、Z ボルドー)
【参考事項】 枝、葉、果実のいずれにも発生するが、特に果実に発生しやすい。 前年伸長した新梢の枝病斑や皮目、落葉痕などに潜伏感染して越冬する。発病適温は12℃前後である。		
黒星病 (<i>Cladosporium</i>)	①病枝を切り取り、処分する。 ②樹勢を旺盛にし、通風、採光を良くする。	①4月上旬～5月上旬に農薬を散布する(収穫前日数に注意)。 (例) アゾキシストロビン水和剤(アミスター10フロアブル) イミノクタジナルベシル酸塩水和剤(バルコートフロアブル) ジフェノコナゾール水和剤(スコア顆粒水和剤) ベノミル水和剤(ベンレート水和剤) 水和硫黄剤(サルファーズル、イオウフロアブルなど) ②多発園では9月中旬～下旬に農薬を散布する。 (例) キャブタン水和剤(オーソサイド水和剤80)(小粒核果類) ③12月に石灰硫黄合剤を散布する。(落葉果樹、越冬病害虫、発芽前)
【参考事項】 枝上の病斑組織内で菌糸の形で越冬する。果実での潜伏期間は約30日と長い。		
灰色かび病 (<i>Botrytis</i>)	①果実上の残っている枯死花弁、発病花は早期に取り除く。 ②枝の過繁茂を避け、園の通風を良くする。 ③豊作年は摘果に努める。	①幼果期に農薬を散布する(収穫前日数に注意)。 (例) イミノクタジナルベシル酸塩水和剤(バルコートフロアブル) クレソキシムメチル水和剤(ストロビードライフロアブル) ジェトフェンカルブ・チオファネートメチル水和剤(ゲッター水和剤)
【参考事項】 雑草を含め野菜、花き、果樹など多くの植物に寄生し、それらの罹病植物が伝染源となる。菌糸の生育、胞子の発芽適温は20℃前後である。		
ウメシロカイガラムシ	①越冬期にワイヤーブラシなどで削り落とす。	①1齢幼虫発生最盛期に農薬を散布する(収穫前日数に注意)。 (例) ブプロフェジン水和剤(アブロードフロアブル)(カイガラムシ類幼虫) ピリフルキナゾン水和剤(コルト顆粒水和剤)(小粒核果類、カイガラムシ類) ②冬期発芽前までに農薬を散布する。 (例) 石灰硫黄合剤(落葉果樹、カイガラムシ類、発芽前) マシン油乳剤(スプレーオイル(カイガラムシ類、発芽前)、機械油乳剤95(落葉果樹(ぶどうを除く)、カイガラムシ類))
【参考事項】 雌成虫で越冬する。幼虫発生期は5月上旬～6月上旬、7月下旬～8月中旬、9月中旬～10月中旬の3回である。		
コスカシバ	①冬期、虫ふんを見つけたら幼虫を捕殺するか、上から小槌などで圧殺する。 ②春先に虫糞噴出箇所を削り取り、捕殺する。	①発芽前(2月)に樹幹に散布する。 (例) フルベンジアミド水和剤(フェニックスフロアブル)(開花期まで) ②落葉後に樹幹に散布する。 (例) MEP 乳剤(ガットキラー乳剤)(休眠期(落葉後～萌芽前)) ③性フェロモン剤を広域に設置する。 シナンセルア剤(スカシバコンL)(果樹類)
【参考事項】 幼虫で枝幹の加害部で越冬する。成虫は年1回の発生で、5～10月まで長期間発生し、5月と9月が発生ピークとなる。		
アブラムシ類		①新梢伸長初期、展葉期に農薬を散布する。 (例) アラニカルブ水和剤(オリオン水和剤40) ジノテフラン水溶剤(アルバリン顆粒水溶剤、スタークル顆粒水溶剤)(小粒核果類) チアクロプリド水和剤(バリアード顆粒水和剤)
【参考事項】 冬寄主の芽の周囲、その付近の小枝で卵で越冬する。 発芽期から夏寄主に移住するまでに1～2回の発生のピークがある。		